

The Mind of Mr. J. G. Reeder
1925
by Edgar Wallace

目次

| | | |
|---|----------|-----|
| 1 | 詩的な警官 | 9 |
| 2 | 宝さがし | 31 |
| 3 | 一味 | 56 |
| 4 | 大理石泥棒 | 82 |
| 5 | 究極のメロドラマ | 105 |
| 6 | 緑の毒へび | 129 |
| 7 | 珍しいケース | 152 |
| 8 | 投資家たち | 171 |
| | 訳者あとがき | 199 |
| | 解説 飯城勇三 | 202 |

主要登場人物

J・G・リーダー……………公訴局長官事務所に雇われる探偵
マーガレット・ベルマン……………リーダー宅の近所の住人

(詩的な警官)

ランプトン・グリーン……………銀行の支店長
アーサー・モーリング……………銀行の夜警
マグダ・グレイン……………グリーンとの婚約者
バーネット……………巡査

(宝さがし)

ルー・コール……………贋金造り
スタン・ブライド……………ルーの友人
ジェイムズ・タイザーマイト……………准男爵。治安判事
マーガレット・レザビー……………タイザーマイト卿の婚約者

(一味)

アート・ローマー……………窃盗団のボス

パーティー・クロード・スタッフェン……ロンドンの実業家

(大理石泥棒)

ロイ・マスタ……マーガレット・ベルマンの友人
シドニー・テルファー……テルファーズ合同会社の社長。マーガレットの上司
ステイーヴン・ビルンガム……テルファーズ合同会社の専務取締役
レベッカ・ウエルフォード……テルファー宅の家政婦

(究極のメロドラマ)

トミー・フェナロー……偽造紙幣の売買業者
ラス・ラル・パンジャビ……宝石泥棒
ラム……ラス・ラルの手下

(緑の毒へび)

モウ・リスキー……ギャングのボス
エル・ラーバット……ムーア人の犯罪者
メアリルー・プレジー……モウ・リスキーの愛人

パイン……………ロンドン警視庁の警部

(珍しいケース)

セリントン卿……………外務次官

ハリー・カーリン……………セリントン卿の甥

アーサー・ラサード……………慈善事業家

(投資家たち)

デ・シルヴォ……………投資会社の代表

ジョゼフ・ブレイチャー……………弁護士

アーネスト・ブレイチャー……………弁護士。ジョゼフの弟

J・G・リーダー氏の心

1 詩的な警官

リーダー氏が公訴局長官事務所に到着した日。それは、ロンドン・スコティッシュ・アンド・ミッドランド（L. S. M.）銀行の支店長、ランプトン・グリーン氏にとって、真実、運命の日となった。

グリーン氏を取り仕切る支店は、イーリングの「片田舎」、ペル・ストリートとファーリング・アベニューの角に位置していた。大方の郊外支店と違ってかなり大きな建物で、その大部分が銀行業務に当てられている。と言うのも、その支店では非常に大きな預金高を扱っていたからだ。従業員名簿に三千人の名を連ねるルナ輸送会社、巨大な売上高を誇る連合ノベルティ社、そしてララフォン電話会社。L. S. M. の顧客は、この三社だけだった。

毎週水曜日の午後になると、これらの会社の給料支払いの準備のために、莫大な額の現金が本店から運び込まれ、鋼鉄とコンクリートで固められた堅牢な金庫室へと納められる。その部屋はグリーン氏の職務室の真下にあつたが、出入りは一般事務室内の鋼鉄のドア一つに限られていた。このドアは外の通りからも見えるようになっていた。監視の効果を高めるために、真上の壁にはランプが取り付けられ、ドアに強力な光を注いでいた。加えて、さらなる安全を確保するために、軍人恩給受給者のアーサー・モーリングが夜警として雇われていた。

銀行側は、四十分ごとに警官が支店の前を通過できるよう、秘密の巡回パトロールを組んでいた。パトロール警官は、窓を覗き込み、夜警と合図を交わすことになっている。職務として、警官はモーリングが姿を現すまで待つていなければならなかった。

十月十七日の夜、バーネット巡査はいつものように大きな覗き穴の前で立ち止まり、銀行の中の様子を窺った。最初に気づいたのは、頑丈な金庫室のドアの上のランプが消えていることだった。夜警の姿は見えない。不審に思った巡査は、夜警がいつものように顔を出すのを待たず、窓の前を通り過ぎてドアへと向かった。心配したとおり、わずかにあいている。ドアを押しあけて中に入り、モーリングの名を呼ぶ。返事はない。

出所は不明だが、かすかに甘い香りが漂っていた。事務室に人影はない。支店長の部屋に入っていると、照明が煌々と灯り、人が倒れているのが見えた。夜警だった。両手首には手錠がかけられ、膝と足首が革ひもできつく縛り上げられている。

胸が悪くなるような、おかしい臭いのもとは今や明らかだった。横たわる男の頭上に、ワイヤーで額長押がくなげしにひっつけられた古いブリキ缶がぶら下がっている。その底にかけられた穴から、モーリングの顔を覆う分厚いガーゼの上に、揮発性の液体のようなものが絶え間なく滴り落ちてきているのだ。

戦時中に負傷経験のあるバーネットは、瞬時にそれがクロロホルムの臭いだと気づいた。無意識状態の男を外事務所に引きずり出し、顔からガーゼを払いのける。警察本署に電話連絡を入れるあいだだけそばを離れたものの、巡査は何か男の意識を取り戻させようと空しい努力を続けた。

数分のうちに警察の待機人員が到着する。通報が入った際に幸運にも本署にいた地区担当医も一緒だった。しかし、気の毒な被害者を蘇生させようとする試みはすべて、空しいものと判明した。

「発見されたときにはすでに死亡していたんでしようね」というのが、担当医の判断だった。

「右の掌にある引っかけ傷についてはわからないが」

医者は、死体の握り拳を押し開き、五、六個ほどの小さな引っかけ傷を見せた。掌に血がこびりついているところからすると、できたばかりの傷のようだ。

バーネット巡査はすぐに、支店長のグリーン氏を起こすために使いに出された。支店長は、銀行があるファアリング・アベニューの角に住んでいた。ロンドン市民には馴染み深い、縞模様の二軒続き住宅が並ぶ通りだ。ドアに続く小さな前庭を進んで行くと、錠戸から明かりが漏れている。バーネットがノックをする間もなくドアがあき、きつちりと身なりを整えたランプトン・グリーン氏が姿を現した。警官の鋭い目からすると、かなり動揺しているようだ。玄関ホールの椅子に、大きな鞆と旅行用の膝かけ、傘が置かれていた。

バーネットの発見について話を聞くうちに、支店長の顔は死人のように青ざめた。

「銀行に強盗が入ったって？ そんなばかな！」金切り声に近かった。「何てことだ！ そんな恐ろしいことが！」

今にも倒れそうな支店長を、バーネットは支えて通りに連れ出さなければならなかった。

「わ、わたしは、休暇に出るところだったんだ」銀行に向かって暗い通りを歩き出した支店長は取り乱している。「実際には——辞職したところだった。手紙を残してきたんだよ——重役たちに説明するための手紙を」

疑わしげな目を向ける人々の中に、支店長はよるめくように入って行った。机の引き出しの鍵をあけて中を覗き込み、絶望的な顔を上げる。

「ない！」彼は大声で叫んだ。「鍵は——ここに入れておいたんだ。置き手紙と一緒に！」

その後、支店長は氣を失った。目を覚ましたときには警察の独房の中だった。そして同じ日のうちに、警察裁判所判事の前で二人の警官に支えられて頭を垂れ、悪夢でも見ているかのように自分に対する告発を聞くことになった。アーサー・モーリングを死に至らしめた罪、さらには、十萬ポンドを横領した罪に問われて。

ジョン・G・リーダー氏が、ローワー・リージェント・ストリートにある自分のオフィスから、公訴局長官に与えられた、建物の最上階にある幾分陰気な事務所に移ってきたのは、裁判が最初に差し戻された日の朝だった。政府の組織など何一つ信用していない彼にとつては、あまり気の進まない異動だった。この件に関して、彼は一つだけ条件を出していた。専用の電話回線で、常に以前の事務所と連絡を取り合えること。

この点について、彼は要求したわけではなかった——彼は決して、何事も要求したりはしない。頼んだのだ。恐々と、申し訳なさそうに。ジョン・G・リーダーには、人の同情心を掻き立てる、どこかもの悲しげな頼りなさがある。この弱々しげな中年男を、恰幅がよく有能で、謎めいた部分もあるホルフォード警部の代わりに起用したことは本当に正しかったのだろうか？ 公訴局長官にさえ、そんな不安を抱かせてしまうような頼りなさが。

リーダー氏は、五十過ぎの馬面の紳士だった。白髪交じりの砂色の髪をしている。頬を広範囲に覆う髭が、幸いにも大きく飛び出した耳から人々の目を逸らさせてくれた。鼻の半ばまでずり落ちた金縁の眼鏡。彼がその鼻眼鏡を活用している姿を見た者はいない——何か読むときには、必ず外されているのだから。てっぺんが平らな高々とした山高帽はお似合いだが、貧相な胸をボタンで締め上げた

フロックコートはいただけない。つま先の四角い靴。幅広で、胸当ての見本のようなクラバット・タイは既製品で、襟の後ろで留められている。リーダー氏の持ち物で最もすっきりとしているのは雨傘だが、あまりにもきつく巻かれているため、軽薄な印象を与えるステッキに見間違われそうなほどだ。雨の日も晴れの日も、彼はこの傘を腕にかけて持ち歩いていた。しかしいまだかつて、その傘が広げられているのを記憶する者はいない。

ホルフォード警部（現在は警視の地位に昇進したのだが）は、業務の引き継ぎのために、その事務所と顔を合わせた。加えて、古い装備や備品といった、細々としたものについても説明した。

「お会いできて光栄ですよ、リーダーさん。これまでこんなありがたい機会には恵まれませんでしたが、お噂はいろいろと伺っております。イングリッド銀行の一件に携わっておられたんですよね？」確かにその名譽にはあざかったとリーダー氏はびや、溜息をついた。まるで、ひっそりと人知れぬ仕事から自分を引き剥がした運命の、暴力的な力を嘆いてでもいるかのように。ホルフォード氏は、すっかり途方に暮れた目で相手を見つめていた。

「まあ」と、困り切った様子で言葉が続ける。「この仕事はまた別物ですが、あなたがロンドンでも指折りの知識人だという話は聞いています。そうであれば、簡単な仕事ですよ。これまで、我々がこの事務所に外部から人を招き入れたことはありませんでした——つまり、いわゆる私立探偵というような方を。当然、ロンドン警視庁も少し——」

「よくわかっております」リーダー氏は、きつちりと巻かれた雨傘を腕にかけて呟いた。「しごく当然なことでしょう。ポロンドさんが面会を求めているんです。細君がひどく気を揉んでおりましてね——まあ、もつともなことです。しかし、そんな必要などないのですがねえ。野心的な女性でして。

近々強制捜査を受けるかもしれないウエスト・エンドのダンスクラブの所有権を三分の一保有しているんです」

ホルフォードはたじろいだ。ロンドン警視庁内でそんな話も囁かれていたが、単なる噂以上のものではなかったからだ。

「いったいどこでそんな話を聞いたんです？」思わず、そう口走っていた。

リーダー氏は謙遜とも言えそうな笑みを浮かべた。

「奇妙な情報のかげらを拾い集める人間がいるものなのです」申し訳なさそうに、そう答える。「わ、わたしは、すべてに悪を見てしまう質たちでしてね。おかしなことじつけではあるのですが——犯罪者の心を持っているというわけです」

ホルフォードは長々と息を吸い込んだ。

「まあ——さしてすることもありませんからね。例のイーリング事件は極めて明快です。グリーンは前科者なんです。戦時中に銀行で職を得て、支店長まで勤め上げたんですが。紙幣偽造で七年間、服役していたんですよ」

「横領と紙幣偽造」リーダー氏が、ぼそりと言う。「わ、わたしは、残念ながら、彼の罪に対する重要な証人だったんです。銀行犯罪はわたしにとって——そのう——趣味のようなものでしたから。ええ、彼は金貸しと面倒なことになってしまったんですよ。愚かなことに——本当に、愚かなことに。なのに彼は、自分の間違いを認めようとしない」リーダー氏は大きな溜息をついた。「気の毒な男だ！ 人間というものは、自分の人生が危うくなって初めて、みっともない言い訳を受け入れるものなのかもしれませんねえ」